

◆大相撲よもやま話◆◆

呼出しの世界

粋な裁着袴（たっつけばかま）姿で土俵に上がり、サッと扇子を開いて「ヒガーィシィー……」と四股名を呼び上げる呼出し。その名のとおり、これから取組を行う東西力士の四股名「呼び上げ」が大きな仕事だが、それ以外にもさまざまな役割で土俵を支える。

その一つが土俵を作る「土俵築（つき）」。本場所の土俵は直前に3日ほどかけ、呼出し総出で完成させる。俵の一つ一つに土を詰める一方、土を盛り上げ、築き、乾き具合を見ながら適度な固さに仕上げる。体力も熟練の技術や感覚も必要だ。

「太鼓」も呼出しの仕事だ。初日の前日には触れ太鼓を叩いて会場近くや相撲部屋を回り、本場所の到来を告げる。本場所中は毎日、櫓に登って櫓太鼓を叩く。朝早くの一番太鼓、打ち出し後の跳ね太鼓と、それぞれに打ち方が違い、「相撲が始まりますよ」「また明日も来てください」といった意味がこめられている。

この「呼び上げ」「土俵築」「太鼓」は呼出しの三大仕事ともいわれる。以前は、例えば呼び上げは行わず、土俵築や太鼓だけを行う専門職の呼出しもいたが、昭和40年1月からは、全員が土俵に上がって呼び上げを行うようになった。

呼出しは三大仕事以外にもさまざまな役割を担っている。土俵入りや結びの一番などで柝（拍子木）を入れるのも大切な仕事だ。支度部屋で、土俵入りが始まるなどの合図としても入れ、言葉を発しなくても柝の音さえ響かせば、とたんに力士たちが準備に動き出す。柝の材質はおもに桜。呼出し全員で共通して使う柝のほか、一人ひとりが自分専用の柝を持っている。

本場所の土俵付近では、呼出しがさまざまな役割を担っている姿を見ることができる。荒れた土俵を掃き清め、ジョウロで水をまいて適度な湿り気を保つ。懸賞金の旗を持って土俵を回り、勝負が決まれば懸賞金の袋を行司に手渡す。幕内力士が控えで使う四股名入りの座布団を取り替え、花道で付け人に渡す。力士がまく塩や、力水に使う水桶の水を補充し、力士が落ちて水桶にぶつかりそうになったら素早く持って避難する。観戦の際には、土俵上の取組だけでなく、土俵にまつわるあらゆることに気を配り、機転を効かせて処理する呼出しの姿にも注目してほしい。



懸賞旗を持って土俵を一周。数が多い場合は何周もすることもある



「不戦勝」の旗を持って土俵に上がるのも呼出しの仕事


土俵をつくる「土俵築」。年6回の本場所のたびに、呼出しが総出で新しい土俵につくり替える


初日の前日、呼出したちがチームをつくって関係各所を回り、初日の取組を披露する「触れ太鼓」


白扇をかざし、次に取組を行う力士の四股名を呼び上げる。写真は、令和8年一月場所から行司の最高位である立呼出しを務めている克之

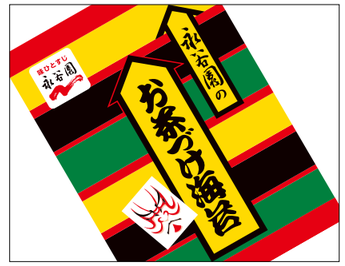

幕内土俵入りでは、呼出しの柝の音に合わせて、力士たちが一人ひとり、テンポよく土俵に上がる。他にもさまざまな場面で柝を入れ、進行を担う


定期的にジョウロで水をまき、竹ぼうきで砂を掃く。鉈の目や仕切り線は手ぼうきで整える





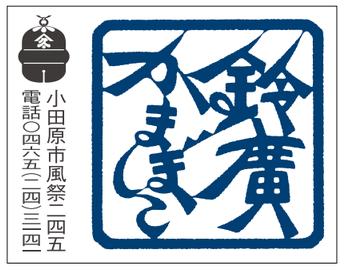
























◆大相撲「モノ」語り◆◆◆

俵

土俵に使われる俵は正式名称を「小俵」といい、全部で66俵が使われている。

土俵の上面で円をつくり、勝負の境目となる役割を果たしているのが16俵の「勝負俵」と、四方にほぼ1俵ぶんずつ外側にずれている4俵の「徳俵」。相撲が野外で興行されていた時代、雨水を排出するためにつくられたのが起源といわれる。外縁の正方形をつくるのが28俵の「角俵」と、四隅に斜めに置かれる4俵の「あげ俵」。斜面には、土俵に上がるための「踏み俵」が正面に1俵、東、西、向正面に各3俵ずつの計10俵。水桶を置くための「水桶俵」が赤房下と白房下に各2俵ずつの計4俵。

俵の直径はいずれも約15ミリだが、長さには違いがあり、勝負俵が約78センチ、角俵・あげ俵は約61・5センチ、踏み俵は約56センチ、水桶俵は約36センチ。良質な稲わらを手作業で円筒状に編み上げた中に、きめ細かな土や砂、玉砂利を詰め、ビール瓶などを使って固く突き固め、荒縄で縛り上げる。土俵に設置する際には、6分を土中に埋め、4分を地上に出すと定められているが、水桶俵は二俵の小俵を束ねて使用し、土中には埋め込まず、所定の場所に置いて使う。



左上から踏み俵、角俵とあげ俵、徳俵、勝負俵。右は水桶俵











◆九州場所の優勝力士◆◆◆

若乃花が初の全勝で北の湖の6連覇阻止

昭和53年九州場所優勝　若乃花（西横綱　14勝1敗）

昭和53年九州場所は波乱の幕開けとなった。6連覇が懸かった東横綱北の湖が、初日早々、東小結麒麟児のすくい投げに不覚を取ったのだ。二日目から立ち直って白星を重ねたが、首位には立てない。西横綱若乃花（2代目）が東張出横綱輪島とともに初日からそろって全勝街道を突き進んだからだ。

若乃花は北の湖と同じ昭和28年生まれ。有望力士がひしめく「花のニッパチ組」の中でもとりわけ華やかな存在だった。若三杉と名乗った頃から、甘いマスクに柔軟な足腰、切れ味鋭い上手投げを武器にした華麗な相撲で人気を集めた。先に横綱へと駆け上がった北の湖の背中を追い、昭和52年一月場所後に大関昇進。同年五月場所で初優勝を果たす。

昭和53年に入ると一月場所から13勝、13勝、14勝と好成績を重ねた。しかし、優勝は3場所とも北の湖。三月場所と五月場所はいずれも本割で北の湖に勝ちながら決定戦で敗れて涙をのんだ。それでも安定した成績が評価され、五月場所後に横綱に昇進して、師匠である元横綱初代若乃花の二子山親方から「若乃花」の四股名を受け継いだ。

新横綱の七月場所は11勝4敗で北の湖が4連覇。九月場所は千秋楽、1敗で単独首位の北の湖と1差の2敗で直接対決に臨んだが敗れ、5連覇を許した。悔しさを募らせ、満を持して臨んだ九州場所で、初日から快調に勝ち進んだのだ。

大きな山となったのは八日目の東前頭三枚目富士櫻戦。激しい突き押しに手を焼き、新横綱から2連敗中だった。しかし、そんな難敵に対して左カチ上げで先手を取り、突っ張られてもまったくひるまず、突き返してから余裕をもって叩き込んで快勝。波に乗ってその後もさらに白星を重ねた。しかし、輪島も全勝で並走し、北の湖も1差でピタリとつける。3横綱の優勝争いが激しさを増す中、十三日目、若乃花は輪島との全勝対決を迎えた。

過去の成績は若乃花の6勝15敗。左の相四つで、輪島のうまさに屈することが多かった。しかし、着実に力の差は詰まり、直近は2勝1敗とリードしている。注目の一戦は立ち合ってすぐ左四つ。若乃花は両まわしを引き、輪島は左下手を取って右からおっつける体勢で長い相撲となり、3分45秒で水入り。再開後、若乃花が引き付けて出て寄り倒して大一番を制し、初日から13連勝で単独首位に立った。この後、結びの一番で北の湖が東前頭十枚目黒姫山に叩き込まれて2敗目を喫する波乱。1敗で追うのは輪島だけとなり、若乃花は優勝に大きく近づいた。

十四日目、輪島が北の湖に下手投げで勝って1敗を死守し、北の湖は3敗目を喫して6連覇の可能性が消えた。若乃花は熱戦の末に東大関三重ノ海を下手投げでねじ伏せて14連勝。若乃花が全勝、輪島が1敗で迎えた千秋楽、結び前の一番で輪島が三重ノ海に寄り切られて優勝が決まった若乃花は、結びの一番で北の湖と対戦。左四つで両まわしを十分につかんで北の湖に上手を与えず、上手投げで崩して寄り切って、2回目の優勝に全勝で華を添えた。

その後、ケガや病気もあって優勝4回にとどまり、北の湖との「北若時代」は実現しなかったが、北の湖の6連覇に待ったをかけた全勝優勝は、若乃花の相撲人生でひときわ大きな輝きを放っている。



5場所ぶり2回目の優勝を全勝で成し遂げての優勝パレード。旗手は同じ二子山部屋の大関貴ノ花



13日目、輪島との全勝対決を水入りの熱戦の末に制し、優勝へ大きく前進









